

渡辺淳一

遠き落日下

角川書店



定価940円

0093-872254-0946(0)

渡辺淳一

遠き落日
下



遠き落日（下）

1979年9月10日 初版発行

著者 渡辺 淳一

発行者 角川 春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話03(265)7111(大代表) 〒102

振替東京3-195208

大日本印刷・宮田製本

Printed in Japan 0093-872254-0946(0)

©Junichi Watanabe 1979

落丁・乱丁本はお取替えいたします

遠き落日（下）

装 丁・原万千子

目次

第一章	デンマーク	五
第二章	ニューヨーク(I)	二七
第三章	ヨーロッパ	三七
第四章	帰国	九七
第五章	ニューヨーク(II)	一三三
第六章	黄熱	一四五
第七章	中南米	一六二
第八章	ニューヨーク(III)	一八〇
第九章	アフリカ	一九四
終章	アクラに死す	二四四

あとがき

主要参考資料・取材等協力

第一章 デンマーク

1

コペンハーゲンはいが美しい街である。

英世が訪れた明治三十六年（一九〇三）は、この国の世界的童話作家アンデルセンの死の三十年あとで、街には彼の存命当時そのままに、尖塔をいただいた教会やレンガ造りの建物が緑のなかに静まりかえっていた。丘に立てば澄みきった空の下、海図を見るようにいくつもの岬が突き出て、まわりを白い波がとり囲んでいる。家は赤、青、白と、童話の国そのままに色とりどりの屋根が並び、家と家は花壇で結ばれている。

「夢のようで、仕事が手につきません」

コペンハーゲン到着後、守之助への第一報に英世はどのように書いている。

この年十月、満二十六歳の野口英世はニューヨークを発って、デンマーク留学の途についた。

大西洋を横断し、途中まずパリに着く。ここで英世は欧州スタイルのアフタヌーン・コートとシルクハットを新調して、写真館で記念撮影をした。小柄な英世が、黒のコートとシルクハットをかぶった姿は、少し滑稽で不似合いであったが、英世は大真面目でカメラの前に立った。

そこで休息のあとデンマークへ向かった。

コペンハーゲンの国立血清研究所所長のマドセン博士は、まだ三十二歳の少壮学者であつた。彼は「ノグチ」という男が、フレキシナー教授の下からくることは知っていたが、それがこんな若く、しかも日本人だとは知らなかった。このあたりがアメリカ人の人物紹介の面白さで、日本なら当然、国籍を先に書くところを、フレキシナーは英世の研究業績だけを詳しく書いてよこしたのである。学問の世界に重要なのは、その男がやってきた業績で人種や年齢は関係ないとはいへ、徹底している。

マドセン博士は英世を快く迎えたあと、「自分をいくつだと思ふか」と尋ねた。英世は少し考えて、「わたしは年齢を当てるのは苦手ですが、六十五歳くらいでしようか」と答えた。

マドセン博士は、この日本人は本気か冗談か、と呆れ顔で、実は三十二歳だと答えた。アメリカにて大分、外人の顔は見馴れていたが、英世はさすがに驚いた。外人は年齢より老けて見えるが、倍近い年齢をいつてしまった。

「日本人では年上の人に敬意を表す場合、できるだけ年齢を多くいうのが礼儀です。本当は百歳ぐらいでもいおうかと思つたのですが、六十五歳ぐらいがよろしいかと思つたものですから」

ワイトをまげながら英世はいつくろう。アメリカへ来て、右も左もわからなかった当時ならうろたえたが、いまは軽いジョークをいう程度の余裕と自信ができていた。

血清研究所は意外に小さかった。マドセン博士らの数多い論文を読んでいただけに、かなり大きな研究所かと思つて来てみたが、所長以下所員は四人しかない。

このマドセン博士の仕事のやり方は、少し変わっていて、朝、出勤してくると、所員が前回やった実験結果を、暢⁷んびりききながら一時間か二時間を過ごす。それから自分の部屋へ行き、またしばらくお茶を飲んだり雑談をしている。ちょっと見ると、仕事はなにもしないようにみえる。

北里研究所からフレキシスナー研究室と、馬車馬のように走り続けてきた英世には信じられない悠長さだが、ここでは科学の経済的応用などということは一切考えなくてよかった。各自が思いどおり好きなことをやり、好きなときに休む。お金や生活のことなど心配する必要はない。死にもの狂いだったフィラデルフィア時代からみたら、まさに別世界の暢気さである。

だが、こうした暢んびりした環境から次の仕事へのアイデアを探っていくというのが、マドセン博士のやり方だった。充分頭を休め休養し、そのあいだに次の研究へのエネルギーが燃えあがってくるのを待つ。

かつて仁科博士が仁科研究所をつくったときも、これと似た状態だったといわれている。所員を高給でかかえながら、とくになにをしろと指示はしない。所員の自由に任せておく。初めのうちこそ、所員達はなんの負担もないので、勝手気儘に遊んでいるが、そのうち遊ぶのにも飽いてなにか仕事をしなくてはなってくる。そのエネルギーが充満してくる機会をとらえて、一気に仕事をさせる。いいかえると無理に仕事に追い込まず、やる気が醸酵してくるのを待つ。

「いまほど、自由で幸せな時間を過ごしたことはありません」

英世は手紙にそんなふうに書いているが、まさしくこの研究所は天国であった。とくに贅沢をしなれば、研究所からの給料で生活は充分やっていける。しかも博士以下、研究所員、さらにコペンハーゲンの人達はみな親切であった。

アメリカ人も気さくで陽気だが、デンマーク人は、それにくわえておっとりしている。人を軽蔑したり、疑うということがない。小柄な英世が街を行くと、名も知らぬ人が帽子をとって「おはよう」と、微笑みながら声をかけてくれるし、道をきけば目的の場所までわざわざ従^ついてきてくれる。こんな平和で静かな街が、この世にあるとは夢のようである。

「学者というのは、こういうところで、じっくり腰を落ちつけて研究すべきなのかもしれません」マドセン博士につぶやきながら、英世はようやく一生を研究者として過ごす決心がついた。

この研究所で、英世はファミュルナーという学生と研究室をとにした。研究室は二十坪はあり、床は石で壁はタイル張り、水道管留具はいずれも真鍮でよく磨かれている。研究所には専属の掃除夫が何人もいて、いつもきれいに整頓されていた。マドセン博士も綺麗好きで、テーブルやソファなどに北風の凝ったものを置くのが趣味だった。

英世は極力気をつけるようにしたが生来のだらしなさがつい出る。研究所にきて三か月目に、論文を一つ紛失したが、マドセン博士はとくに非難することもなかった。「場所が変ったせいかな、わたしはまだ浮わついているようです」自省をこめて、英世は守之助の手紙に書く。

この研究所で、英世はマドセン博士とともに、蛇毒の免疫についての研究をはじめた。アメリカからくるとき、英世はガラガラ蛇の毒液を乾燥させた粉末を百グラムほど持ってきていた。これを山羊に注射し、山羊の血液中にこの毒に対する抗毒素を産生させる。そのうえで血清をとり、蛇に噛まれた動物に注射してやると、血清中の抗毒素が働き大事に至らず助かる。

実験がうまくいったとき英世は異様にはしゃぎ、誰彼となく口をきき、冗談をいう。だが失敗すると途端に頭を抱えこみ、無口になる。

「まるで世界が終ったかのような気のふさぎようだ」ファミュルナーは、その感情の起伏の激しさに呆れたが、英世にはこういうエキセントリックなところがあつた。仕事に熱中したすと、食事も忘れて打ち込むが、逆に気がのらないと、研究室も論文も乱雑に放りなげたまま遊び出す。英世への毀誉褒貶は、この性格のいずれの面を見たか、そしてそれを許せるか否かによって、ずいぶん異なってくる。

この国立研究所に、デンマーク王家のインゲボルグ内親王と英国のアレキサンドラ皇后が連れ立って

見学に訪れた。小さな、しかし民主的な国だけに、皇族の訪問といっても格式ぶらない。四、五人の付きの人だけを連れて、マドセン博士の案内で見て廻られた。

内親王は特異な風態の英世に目をとめられて、どこからきたのか、ときかれたあと、「デンマークに一人できて、淋しくはありませんか」と声をかけられた。

英世は硬くなって辛うじて、「いいえ」とだけ答えた。

このあと内親王は国王に、日本人が国立研究所にきて勉強をしていることを告げたらしい。その後マドセンが国王陛下に会ったとき、「研究所にいる日本人は元氣か」と尋ねられた。それをアメリカへ帰ってから、マドセンの手紙で知った英世は感激し、「もったいない」と手紙に頭を下げた。

「国王陛下がわたしの様なものことまで御存知とか、これほどの感激はございません。いまはひたすらコペンハーゲン時代の、楽しく幸せだった日々を、思いおこすばかりです。インゲボルグ内親王には、幸運にもお会いすることができ、お姿はいまも胸にやきついています。あのような高貴な方の思し召しに、いかにしてこたえるべきか、方法とてわかりません。わたしは先生を通じて、陛下の御健勝と輝かしき御統治、さらに多くの芸術家および科学者の輩出することを、ひたすらお祈りするばかりです」

帰米後マドセン博士に宛てた手紙だが、明治時代、日本の貧農に育った英世にとって、王室というのはまさしく神に近い存在であった。

研究所に来て二か月ほど経った一九〇四年一月、英世はマドセン博士とともに英国へ行った。オックスフォードでの血清学会に出席のためである。このとき、英世は英国と英国人について遠慮のない批判をした。一部は好意的であったが、ほとんどは批判的なものであった。アメリカのように開かれた国しか知らなかった英世にとって、イギリスの古色蒼然とした權威主義と東洋人を見下すイギリス人の態度

に我慢がならなかったのである。

これをきいたマドセンは、「君はイギリスに来たら、たちまちいろいろ感想をのべるが、デンマークではいくらきいてもなにもいわなかった。それはどういうわけかね」

「デンマークでは、わたしは先生に教えを受けている一介の学生です。こんな若造が、御国のことに、いろいろ批判がましいことをいっては罰が当たります。とくに先生のお父様は陸軍大臣という要職にある方ですから、失礼のないように控えていたのです」

「そんなことは遠慮せず、感じるところがあれば、どんどんいつてくれたまえ」

「いえ、デンマークに関しては、わたしが批評する余地など、まったくない平和で明るいこの世の天国です」

デンマーク人の鷹揚な優しさにくらべ、英国人はみな無愛想で貧相な東洋人などに目をくれる者もない。

2

この年、二月四日、日本はロシアに対して宣戦布告をした。

北歐圏にあって、ロシアと密接な関係にあったデンマークでも、このニュースはいち早く知らされ、人々は戦の進展について論じ合った。外国生活が長くなるにつれナショナルリストになっていた英世は当然無関心ではいられない。このとき、英世が血脇守之助に送った手紙には、当時のヨーロッパの様子がよくでている。

「（前略）今回の日露戦争は、先の日清戦争の復讐をかね、わが国の積年の怒りをはらす戦争であれば、全国民一致団結して対処していることと思います。

二月八日からの度々の旅順海戦はすべてわが軍の勝利に帰し、欧州各地は電撃にでも触れたように驚き、疑い、嫉妬と、さまざまな感情が混り、重なっています。ロシアは欧州で最強国と思われ、全ヨーロッパはロシアの動きに口出しするのを避けているほどですから、今回の日本軍の勝利をきいて、みな予想外の感を抱いています。

小生は英・独・仏はじめ当所の新聞など、あらゆる新聞を買い込み、戦争の情報を求めています。戦地の報道は、どの新聞も大同小異ですが、各新聞の社説はまちまちで、その都度、各国の考え方が推測されます。

フランスの新聞は大半がロシア轟（とどろ）くで、政府党新聞などは公然と、ロシアに加担すべきであると唱え、日本を半未開の野蛮国呼ばわりしています。一部ではロシア軍の勝利を故意に捏造（ねつぞう）し、国民全体をけしかけているありさまです。ドイツはもう少し狡猾で、表面は中立と見せていながら、陰でロシアに情報を通じ、最終的勝利をおさめるように画策しているかのようです。ドイツの新聞の日本に關した記事は、フランスに劣らず悪口罵言をきわめています。これに反しイギリスの新聞は、陰に陽に、日本を援け、国民の同情を向けるようにしています。最近、チベット問題でロシアと危機一髪の状態であり、くわえてフランスとの国交も切迫していることなどききますが、それらが日本へ好意的な理由なのかもしれません。

またロシアの黒海艦隊大小合わせて十五隻、東洋に向けて進航中、スエズ海峡で引戻しの命令にあつたとの説もありますが真偽はよくわかりません。もつともこの艦隊は実戦には、あまり役に立たないとの評判もあり、若し東洋に廻航すれば、日本艦隊の餌食になるだけだろうともいわれています。バルチ

ツク艦隊も、しきりに東航をくわだてているようですが、ジブラルタル海峡を通過し難いとか。陸上の戦闘はまだないようです。

あるフランスの新聞は、日本軍二個連隊が、コサツク兵のため旅順付近で全滅させられたと伝えています。嘘ではないかと思っています。

概してヨーロッパは人種的親近感から、ロシアの勝利を祈っているようですが、多数の新聞は、陸上の戦闘がどうなるかということに、関心を抱いているようです。彼等は日本軍にくらべて、ロシア軍の優勢を信じ、ロシアの必勝を予言しています。これは海軍はともかく、日本陸軍がいかに勇敢かを知らぬからで、もしさらに日本陸軍の強力なのを知ったら、なんというか。彼等は野蛮な日本人は戦に適している、というかもしれません。

彼等はしばしば我国を蔑視し、道義的文明が遅れていることをあざ笑っています。たしかに表面的にはそうかもしれませんが、日本国民はどんな場合にも、道義に背いたようなことはするわけがありません。日本軍人は戦時平時において、まだ彼等のような泥棒、殺人、強姦などをせず、日本人はまだ白人のように隠密に悪事を働いたりはしません。また彼等はしばしば日本男女間の乱れを公言しますが、では彼等ははたしてどんな生活をしているか。妾、間男、私通、売春、いたるところで目撃します。

彼等は日本人はまだ自分達の内情を知っていないかと思ひこんでいるようです。しかし余程愚鈍でもないかぎり、彼等の内情を探ることぐらいたやすく、白人の特長は外面はよく装い、綿密な観察力（これは猜疑心と併行します）を有する点にあります。しかしいつか、世界の物質的文明が同程度に達したときには、彼等の特長は黄色人種にもゆき渡り、白人だけの特性でなくなることは間違ひありません。小生、近頃、日本より新聞を受け取らず心細い次第です。この手紙と同時に時事新報社へ送金したので、遅くとも四月末には新しい新聞を見ることができると期待しています。

齋藤氏からは、九月以来文通がなく、わたしも手紙を出していません。一体、どんなことになっているのか不明です。わたしの留学中は約束の娘を教育すべきだと思うのですが、……少し情ない話です。猪苗代からは毎度、破談を希望しますが、三か年間、待ちに待っている娘の気持を思うと、心も痛み、おおいに返答に困っています。愚母よりは三、四度、同じような手紙を送ってよこしており、このさいどうしたものか、判断しかねています。

ついては大変恐縮ですが、恩師の御意見、および齋藤氏の方の始末などにつき、御教え下されば幸いです。

この手紙がそちらに着くころには、陸戦の様子もわかるころかと思います。ひたすら我軍の全勝を祈り、あわせて皆々様の健康をお祈りいたしています。当地はかなり厳しい寒さですが、雪はほとんど積もりません。

御奥様はじめ、皆々様によりしくお伝え下さい。まずは御無沙汰をお詫びし、近況御報告まで」

日露戦争と許婚者のことと、英世の頭はそれらのあいだを目まぐるしく動く。しかし戦争がはじまって、英世は落ち着いて仕事をしていられなくなった。

学問的には、人材主義の定着していない母国に愛想をつかしながら、いざ戦争となると話は別である。東洋の未開国の黄色人種として、欧米人のなかにいた英世が、ナシヨナリストになるのは無理もなかった。日本へ大金十四円を送って新聞を求めたのも、戦争の様子を知りたい一心からであったが、四月になっても送ってこない。英世は苛々しながら、横文字の新聞と、人々の噂で戦争の様子を探っては、守之助への手紙に次のように書く。